

## ▲対談「自分史を語ろう」

佐木館長がホストを務める対談「自分史を語ろう」を第六回に続いて開催しました。

北九州市自分史文学賞をはじめとする「自分史文学」の情報発信拠点として、様々な分野で活躍する市民の方に自分史をお話しいただいています。

### 【第七回】

\*お話||木瀬照雄さん  
11月16日(日)



北九州を代表する世界企業TOTOのトップ・木瀬照雄社長(現・会長)をゲストにお招きしました。温水洗浄便座「ウォッシュレット」の販売秘話をはじめ、営業出身社長としての経営哲学も語ってくださいました。一方、八幡東区出身の木瀬さん。学生時代は、毎月文芸誌を読み、吉本隆明や高橋和巳に傾倒したと言います。京都大学教育学部へ進んだのは、当時流行した催眠術を勉強するためな

ど、愉快なエピソードも披露。木瀬さんの快活な語り口へ、会場からは「本社を東京へ移さないで」などの声も上がり、大いに盛り上がりました。

### 【第八回】

\*お話||福田浩一さん  
1月25日(日)



株式会社 山口銀行・福田浩一頭取をゲストにお招きしました。開始早々、浪人時代に初めて書いたラブレターや、きっかけは広島カープの優勝という意外な入社動機など、ユニークなエピソードを次々に愉快にお話し下さいました。その一方で、日本銀行からの頭取も公的資金も迎えない「独立自尊」の精神や、地域社会とアジアを同時に見据える「健全なる積極進取」の姿勢など、「やまぎん」独自のビジョンについても熱く語ってくださいました。来場者からの「座右の銘は？」との問いには、「随所に主となれ」

と。時に、進行役の佐木館長に逆質問を投げかける場面も見られ、昨今の暗い経済ニュースを払拭する、活発な会となりました。

### 【第九回】

\*お話||大神良彦さん  
2月22日(日)



ゲストは、門司の総氏神として信仰を集める甲宗八幡神社の宮司・大神良彦さん。英語教師を目指していた大学在学中に急遽神社を継ぐことになったいきさつ、若くして伝統ある神社を切り盛りする日々の苦勞や喜びなど、様々なお話を披露してくださいました。会場では、氏神社内の能舞台「神恵閣」再建を指揮した若き棟梁のご紹介もありました。対談終了後は、多くの来場者から、神社の歴史やしきたりについての質問や、若き宮司へのエールが次々に飛び出し、終了時間まで賑わいました。

## ▲岩橋邦枝・柴田翔講演会

2月8日(日)

北九州市自分史文学賞の審査員を務める作家の岩橋邦枝さんと柴田翔さんをお招きして講演会を開催しました。

まず岩橋さんに、「読書と創作をめぐる自分史」と題して、ご自身の体験談を交えながら、女性作家の戦後文壇についてご講演いただきました。



岩橋 邦枝さん

戦前、戦後しばらくは、「文壇では女であることにハンディキャップがあり、「文学か、結婚か」の覚悟を迫られる時代に扱われる時代であった」。野上弥生子、宮本百合子、林芙美子、曾野綾子ら多くの女性作家の悪戦苦闘があつて現在の女性文学が開かれてきたと解説。最後に、「現在、日本の女性作家は恵まれた環境の



柴田 翔さん

中で次々に活躍しているが、この勢いは発展途上にある。本物の力がつくのはこれからであり、「楽しみ」と結ばれました。

次に柴田さんから「未来のための日本語を」と題して、言葉とは何かという課題を紐解きながら、近代言語の成立から言葉の揺らぎ、これからの言葉がどうあるべきかについてご講演いただきました。

「現代は『美しい日本語』ということが言われすぎているのではないか」と問題提起。日本語の変化を分析しながら、「思い込みの中の良い日本語に固執せず、自分と違う日本語があることを認めることが大事」であり、文学は多様性を認めて言葉を多彩にしつつ、中心には論理的な日本語が求められるものであると指摘しました。